追悼のことば

緒方俊治君、

今ここには君のことを心より思ってくれている方々が多数集まってくれました。
君がこんなにも早く逝ってしまうとは全く思ってもみなかったので今日もまだ信じられない気持ちでいます。この集まりに君がにこやかな表情でビールを片手に参加しているような思いですが、写真の中の君にしか会えないのがさみしい限りです。
今日は順子夫人をはじめご家族の方々と山岳会、山岳部の親しい仲間が集い、君をしのぶ会をこれから開催させていただきます。

“さあ頂上に登ろう。いよいよ最後の登りだ。「緒方、先に登れ。」ためらっている緒方をうながす。若い者に頂上を先に踏む栄誉を与えてやろう。率直でおとなしい緒方は、いつもと変わらない落ち着いた態度でうれしそうにうなずく。ふたりはゆっくりと真っ直ぐに頂上に向かった。９時１５分、緒方が、続いて井上がシェルピ・カンリ、7380m の頂上に立った。”
———コンダスの女王シェルピ・カンリ登頂記の一節です。

学園紛争に荒れた学生時代に山岳部を共に過ごした緒方に信頼を寄せたのは私が上級生で冬の前穂高北尾根に挑戦した時以来です。横尾谷のキャンプで雪が止んだ朝、涸沢から五六のコルへキャンプを進めようという時、「これぐらいの天気なら行けるぜ」と皆を煽る私に「だめです。雪崩が危険です。」ときっぱりとその日の行動をやめさせた時でした。厳しい登攀もすました顔でこなしていた彼ですが、一方では慎重、冷静でした。その後も数多くの山行を共にしました。シェルピ・カンリ遠征で登頂隊員に緒方と私が選ばれたときは、最高のパートナーを得て、登頂成功間違いなしと思い本当に幸せでした。

スキーは登山靴と古い板でいつも悪戦苦闘していた緒方でした。そして最後尾はいつも緒方と決まっていました。しかし、最近 20 万円投資して最新の装備を調達しましたが、共に下った氷ノ山や大日ケ岳では先頭集団にぴったり続いてきたではありませんか。君は、本当はスキーも上手だったのでした。

緒方が山岳会の中心メンバーとして長年貢献してくれたことは誰もが認めるところです。事業者として多忙な生活を送る中でクーラカンリ遠征に参加しました。そして登攀隊長として初登頂を成功させたことは登山家としても一流の資質の持ち主であったことを証明しています。

昨年、夏の終わりに私の山荘、HaksanView に再びやってきた時は庭の焚火を囲んで熱く次の遠征を語りました。崗日嘎布遠征では最高峰のルオニイ峰から第二の高峰、Lopchin に対象を変更して世界初の山脈未踏峰登頂成功となりましたが、緒方はルオニイ峰の可能性について何度も議論を挑んできました。納得のいかないことは徹底して議論を尽くす姿勢を持っていました。ルオニイを目指すべきとの主張であったと思います。時にはこうした意見の食い違うこともありましたが、はっきりと自分の意見を出す、その点でも緒方は信頼できる仲間でした。

例会山行で氷ノ山に登った時、現役部員に未踏峰登山の魅力を語り、遠征参画を勧めるとともに、山形遠征委員長、緒方隊長で次はやるぞ、とふたりは固い握手をしながら皆の前で誓いました。

２０１５年は神戸大学山岳部創部１００周年を迎えます。山岳会・山岳部には記念事業として、再び崗日嘎布山群の未踏峰に遠征隊を出す計画であります。その実現に大きく貢献してくれるはずの緒方でした。彼の遺志を継いで何としても実現、成功させたいと思っています。

冬の富士山はヒマラヤ登山と同等の困難さを有しています。そこに毎年挑戦を続けていたことは、常に登山家として次なる未踏峰登山への夢を心に秘めての行動であったと思います。彼の事故は残念でなりませんが、緒方でも事故がありうる、という自然の脅威を再認識せざるを得ません。

緒方君、ご子息たちは立派に社会人として活躍されています。君は秋には初孫の宮参りもありました。今年は事業を整理して、山中心の生活を楽しみにしていたことと思います。その実現を前にして逝ってしまったことは誠に無念だと思いますが、大きな目で見れば充実した人生であったと思います。どうかこれからは順子夫人をはじめご家族の皆様を見守ってあげるとともに、山岳会・山岳部の発展を末永く後押ししてください。

救援に駆け付けたあの寒い朝、現地に急ぐ私の眼前に、まだ暗い空の下、水平線に真っ赤な朝焼けと黒いシルエットの富士山がとても美しく現れました。その懐に君が冷たく横たわっていると思うとたまらなく、涙で前方が見えなくなり、思わず車を止めてしまいました。

これから富士山を見ると君のことを思い出し、また涙することでしょう。

２０１３年２月１６日

山岳会　会長　井上達男